

3)

気管支喘息と和漢薬

— in vivo と in vitro —

国立小児病院アレルギー科・国立小児医療研究センター免疫アレルギー研究部

飯倉洋治、斎藤博久、七条孝三郎

気管支喘息はヒポクラテスの時代から記載されている病気といわれ、現在は増加の一途をたどっている病気といわれている。

アレルギーを専門に勉強している立場で、治しにくいし、増加している現実をみるのは反省の毎日であるが、最近ほのかにコントロールはどうすればよいのかがわかってきた。

ポイントは喘息を治そうなどと考えるのではなく、如何に上手に病気とつき合わせるかを医師が理解し、その患者の特徴を可能な限り追求することにあるといえる。

その後必要になってくるのが漢方薬で、本剤を如何に使うかが患者にとって一つのメリットと思う。

そこで、今回は演者らが行なった研究結果から、漢方薬を小児気管支喘息に如何に用いるのかの根拠を科学的に述べてみる。

1) 気管支喘息に用いている漢方薬の種類は小青竜湯、麻杏甘石湯、柴朴湯、小柴胡湯である。

2) 小青竜湯、柴朴湯、麻杏甘石湯の抗アレルギー作用に対する検討：ラットのPCAに対する小青竜湯、柴朴湯連続投与による抑制作用は両剤とも投与量が多い場合抑制作用がみられたが、柴朴湯の方がより強かった。

麻杏甘石湯に関しては、マウスの骨髄由来 mast cell の histamine release を調べた結果、麻杏甘石湯は非特異的刺激に対する反応より、特異的刺激に対する反応をより強く抑制した。

3) 小青竜湯の経口投与によるヒト cortisol, ACTH の変動：投与による両ホルモンの増加を認めた。

4) 小青竜湯、柴朴湯の抗ヒスタミン作用に関して：モルモット、ヒト気管支平滑筋のヒスタミンによる収縮抑制を調べた結果、両剤ともヒスタミンによる抑制が著明にみられた。

5) 気管支喘息に対する漢方薬の使用に対する演者らの考え方について話す予定である。